

## 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 7 月 8 日現在

機関番号：36101

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23700763

研究課題名（和文） 駆け引きのプロセスを楽しむブラジル武芸カポエイラの教材化のための基礎研究

研究課題名（英文） A fundamental study of the teaching material of Brazilian martial art Capoeira that enjoying the process of tactics.

研究代表者

細谷 洋子（HOSOTANI YOKO）

四国大学・生活科学部・助教

研究者番号：60389856

### 研究成果の概要（和文）：

駆け引きのプロセスを楽しむカポエイラ教材の基礎的研究として、カポエイラの社会的位置づけ、カポエイラの基礎的な身体技術、練習内容の軸となるカポエイラの理念を明らかにした。その結果、カポエイラは「問いかけと応答」という行為の意味を重視することが特徴といえ、異文化間教育などにおける教材化の軸になる理念であると考察された。

### 研究成果の概要（英文）：

For the fundamental study of teaching material of capoeira enjoying the process of tactics, I clarified the social role of Capoeira, the basic body skills of Capoeira and the center idea of Capoeira training. As the results, it is the characteristic of Capoeira that the meaning of actions as well “question & answer” is the most important thing. And this characteristic is the center idea of capoeira as teaching material for international education in Japan.

### 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学、スポーツ科学

キーワード：スポーツ人類学 カポエイラ 民族スポーツ 教材解釈 アフロ・ブラジル文化 異文化間教育

### 1. 研究開始当初の背景

近年加速するグローバル化を背景に、互いの国や地域の文化を理解し尊重する姿勢が求められている。そのためには、知識としての理解だけでなく、体験を通じた文化理解が有効であると考えられる。とりわけ、身体を介する伝統スポーツのような身体文化の体験は、多様な価値観に直接触れることによって、まさに異文化に入る体験となり、異文化理解を促進する一助となりえるといえよう。

こうした中、日本では、アジアやアフリカ地域の身体文化を対象とした体験授業などが既に学校現場で行われている。しかし、日本から地理的に最も遠い南米の身体文化はこれまで取り上げられることが少なかった。ところが、南米ブラジルの身体文化であるカポエイラは、2000年以降、様々な日本のメディアでも注目され始めている。そして小学校から大学において異文化体験授業として実施されることが年々増えている。

カポエイラは、身体技術の複雑さから「難しそう」という印象を抱かれることが多く、日本では「速い蹴りとアクロバットが中心のダンス格闘技」という認識が広まっている。だが、そのような身体技術は、カポエイラの豊かな身体技術の一部分にすぎない。更に、カポエイラのゲームでは、勝敗を決めることよりもむしろ「駆け引きのプロセスを楽しむ」ことが重視されているといっても過言ではない。ゲーム中の「駆け引きのプロセスを楽しむ」ことは、カポエイラの特徴といえよう。

このカポエイラ独自の特徴は、ブラジルの身体文化として体験授業で伝えられることが望ましい。しかし、そのような文化的特徴を捉えたカポエイラ教材研究は日本においてほとんど成されていないのが現状である。

以上を踏まえて、カポエイラの文化的特性を軸にした授業内容について、明らかにする必要がある。



【写真1】アバダ・カポエイラのゲームの様子  
(2013年3月リオデジャネイロにて筆者撮影)

## 2. 研究の目的

近年のカポエイラは、ゲームで勝敗を決めることよりも「駆け引きのプロセスを楽しむ」ことに価値を置いている。そのようなカポエイラ独自の考え方を軸にした教材開発を念頭においている。

そのために、本研究ではカポエイラの基礎的身体技術「ジンガ」と、カポエイラ特有の理念を明らかにする。そしてカポエイラで伝えられるべき文化的特性を考察することを目的とする。

## 3. 研究の方法

カポエイラ特有の身体技法と理念について、文献研究（既存の文献資料の収集と分析）とフィールドワークを行った。

文献研究では、日本語、ポルトガル語、英語を中心に、人類学と教育学、社会学などの文献資料を収集した。

フィールドワークでは、ブラジルにおける大人を対象としたレベル別のカポエイラ講習会、幼児や児童対象のカポエイラ練習クラ

ス、カポエイラの競技大会への参与観察ならびに観察的参加をおこなった。

ブラジルにおけるフィールドワークは、2011年8月に約1ヶ月間、2013年2月に約1ヶ月間行った。調査地は、リオデジャネイロ州リオデジャネイロ市である。

カポエイラは様々な流派が存在しており団体や地域によって身体技術も異なるため、調査対象は特定の団体に絞ることが望ましい。したがって、世界的に所属人数が最も多い(2013年1月現在約50カ国に4万人程度)とされるリオデジャネイロに本部を置く団体であるアバダ・カポエイラ

(ABADÁ-CAPOEIRA カポエイラ芸術の支持と発展のためのブラジル協会)を対象にした。2013年で25周年を向かえる当団体は、設立当初から常に「カポエイラらしさ」を追求し続けており、普及と発展のための様々な取り組みを行ってきた。また、当団体は、学校教育や福祉活動へのカポエイラ導入についても積極的であり、身体技術の体系化も比較的進んでいる。こうした理由により、調査地をリオデジャネイロに選定した。

文献研究とフィールドワークで得られた資料を元に、(1)カポエイラの社会的位置づけ、(2)カポエイラの基礎的な身体技術、(3)練習内容の軸となるカポエイラの理念を考察した。

## 4. 研究成果

### (1) ブラジルにおけるカポエイラの社会的位置づけ

1500年にポルトガル人が入植して以来、様々な民族・人種がブラジルで共存してきた。大航海時代にはアフリカ系黒人が奴隷貿易で連行された。そして、地元インディオやヨーロッパ系文化の影響も受け、それぞれが混ざり合い、新しい文化が創造された。その中でも、アフリカ系民族の影響を強く受けて創造された文化はアフロ・ブラジル文化と呼ばれ、カポエイラはその象徴的な身体文化である。

ブラジル政府によれば、「アフロ・ブラジル文化のカポエイラは10年間法律によって禁止されたが、1930年代にはようやくカポエイラの実践が認められ、文化的顕現としてのスポーツという一つの変化が生じ、1953年にはメストリ・ビンバによってヴァルガス大統領に披露された。大統領はカポエイラを大変気に入って『素晴らしい真の国家的スポーツ』と呼んだ」(2013年6月1日、ブラジル政府ウェブサイト Portal do Planalto: <http://www.brasil.gov.br/sobre/cultura/cultura-brasileira/cultura-afro-brasileira/print>)と解説されている。

カポエイラは黒人奴隷によって創造され

たといわれており、かつて奴隷文化の象徴であった。しかし、上述したようにブラジル政府によって、カポエイラは「真の国家的スポーツ」という新たな社会的地位を獲得したのである。実際に、2010年の憲法改正法令12288号によって、ブラジルで創造されたスポーツとして正式に定められている（2013年6月1日、ブラジル政府ウェブサイト Portal do Planalto: Senado Federal: Subsecretaria de Informações. <http://www6.senado.gov.br/legislacao/ListaTextoIntegral.action?id=240893&norma=261827>）。

2003年には、ブラジル政府が法令10639号においてかつてマイノリティとされていた文化の教育を義務化した。これはアファーマティブアクションとしての人種政策の一環として位置づけられた。

具体的には、初等教育（6歳～14歳）と中等教育（15歳～17歳）における「アフロ・ブラジル文化と歴史の教育を義務化」した。この目的は、民族・人種差別を根絶することであり、そのためにブラジルの歴史上におけるアフリカ系ブラジル人やアフリカ文化の貢献を学び、今後ますます増加するアフリカ系混血ブラジル人が生きるブラジル社会を、より深く理解することが目指されている。

こうした近年ブラジルの政策が示しているように、奴隷文化の象徴であったカポエイラは多人種国家ブラジルの混淆社会文化の象徴として肯定的に位置づけられ、多重的な役割を付与されている。

## （2）カポエイラの基礎的な身体技術 —基本ステップのジンガについて—

ここに挙げるカポエイラの基礎的な身体技術はそれぞれに動作の目的を明らかにしている。しかしながら、カポエイラでは、ゲームの文脈によって、身体技術は常に多重的な意味を有しており、一つの目的だけで行われるわけではない。例えば、移動技も相手の蹴りのタイミングに合わせて行われた場合は、よける行為も同時に行われていることになる。このようにゲームの文脈によって動作の意味は多重化するということを始めに付しておく。

フィールドワークでカポエイラの練習（2011年：2～3時間／回×25回、2012年：2～3時間／回×16回）を参与観察した記録によると、繰り返し行われる基本動作が表1のとおり抽出された。

【表1】カポエイラの基礎的な身体技術

①ステップ	ジンガ（交互に足を下げ、左右に重心が移動するステップ）
②構え	カデイラ（両足を肩幅程度に開いた状態で膝を90度程度屈曲させて手は顔の防御する）

③よけ動作	主に3種類 （前向き、横向き、斜め向き）
④蹴り動作	直線系 回転系
⑤移動動作	両手を地面につく移動 方向を変える動作
⑥手の動き	ジンガや構えのときに相手への 攻撃や防御を行う

（筆者作成）

それぞれの動きにおいて特に留意する点がある。本稿では、特に、全ての動きの起点であり終点である①ステップのジンガについて述べることにする。①ステップのジンガは、初心者から熟練者まで、どのレベルにおいても練習によって変化し、洗練されていくといわれている。41回分のカポエイラ練習クラスを参与観察した時に、指導者がジンガについて言及した内容をまとめると、次のとおりであった。

- ・もっと上体を（左右に）ゆらす
- ・腕は顔の前にしっかりと持ってくる
- ・手を入れ替えるときに、大きく腕を使う
- ・指先の形（手のそろえ方）は自然な形にする
- ・（ジンガの動きに）リズムをつける
- ・弦楽器の音を聴く（弦楽器のテンポやアレンジなどの弾き方に応じて動く）
- ・落ち着いて動く
- ・相手をよく見て動く
- ・後ろに引いた足の踵を上げる

以上がジンガの留意点として挙げられた。

ジンガは基礎的なステップであるが、指導者からの言及によると、いかに全身の動きが重要であるかが読み取れる。

指導者の言及は、手の動きや上半身の動き、動きの流れ、全身のバランス、音楽と動きの関連まで多岐にわたっていた。したがって、基本ステップのジンガでは、足の動きと共に上半身の動きや、相手への応答性も重視されていると考えられた。

## （3）練習内容の軸となるカポエイラの理念

現代のカポエイラには、暗黙のルールがいくつもある。一つ目は、基本的には相手の蹴りをよけるが、蹴りがあたりそうな場合は寸止めにするのである。そして二つ目はゲームの最中に背中やお尻を床に着けないことである。そのほかにも、ジョゴの文脈に応じて、暗黙のルールは多く存在する。ゲームを行う際には、これらの慣習に従いながら動きの連続性や相手との動きの掛け合いのスムーズさ、そして発想力や創造性が求められる。

また、カポエイラのジョゴの駆け引きは特

徹的な理念に基づいて行われる。代表的なものに、マリーシア、マンジンゲイロなどがある。マリーシアとは、狡猾さ、ずる賢さと訳されることが多い。相手を巧みに騙しながらゲームを展開していく遊び心とも言える。そして、マンジンゲイロ（または、マンジンガ）とは、魔術や呪文という意味である。カポエイラを行う時には、魔法にかかったようにピリンバウや歌からも不思議な力を得ながらゲームをすると考えられている。

このような理念はゲーム中の駆け引きを豊かにし、勝敗よりも駆け引きを楽しむという授業内容の布石となるといえよう。

一方、カポエイラでは、技の完成度よりも行為そのものに意味があり、「問いかけと応答」という意味を重視する傾向があることが文献研究により明らかになった。カポエイラの身体技術そのものの行い方も重要ではあるが、その動きを通じて、行為にどのような意味が生成されるかという点を重視している。

このように、カポエイラの理念として、駆け引きを楽しむためのエスノサイエンスに支えられた世界観（マリーシアやマンジンゲイロ）と、「問いかけと応答」という意味を重視することが明らかになった。

冒頭で述べたように、カポエイラは、身体技術が一見複雑である。しかしながら、「問いかけと応答」を軸にした活動では、身体技術の習熟度によらない「駆け引きのプロセスを楽しむ」ゲームが体験できるのではないだろうか。

本研究では、カポエイラ教材の基礎的研究として、カポエイラの社会的位置づけ、カポエイラの基礎的な身体技術（ジンガ）、練習内容の軸となるカポエイラの理念を明らかにした。今後、継続的に教材解釈を行うと共に、これらの基礎的研究を元に、次段階の内容構成や教授法の研究開発が課題となる。また、異文化間教育としての社会的要請とも関連させてカポエイラ教材の教育意義も勘案されるべきであろう。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計3件）

- ① 細谷洋子「ブラジル公立幼稚園のカポエイラクラスの活動内容と身体技法習得—3~5歳児対象クラスを事例にして—」、日本体育学会第62回大会、2011年9月7日、鹿屋体育大学
- ② 細谷洋子「ブラジル武芸カポエイラの実践授業—民族スポーツ教材化の意義と可能性—」第1回大学体育研究フォーラム、2013年3月15日、武蔵野美術大学

- ③ 細谷洋子「ナショナル・アイデンティティ表象としてのカポエイラ『混血』から『アフリカ性』へ—」、日本スポーツ人類学会第14回大会、2013年3月25日、金沢大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

細谷 洋子 (HOSOTANI YOKO)  
四国大学・生活科学部・助教  
研究者番号：60389856